

2022 年 7 月

食料安全保障月報

(第 13 号)



令和 4 年 7 月 29 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 7 月食料安全保障月報（第 13 号）

目 次

概要編

I	2022 年 7 月の主な動き	1
II	2022 年 7 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報 ウクライナ情勢下での米国と世界の穀物生産・輸出動向 （資料）	5
1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 生産量は冬小麦が減少するものの春小麦が回復し前年度を上回る	
	＜カナダ＞ 干ばつ被害から回復し、生産量は前年度に比べ 5 割以上増加	
	＜豪州＞ 生産量は史上最高の前年度を 17.4% 下回るも 30.0 百万トンの見込み	
	＜EU27+英国＞ EU27 の生産量は前月予測に比べ 5.8 百万トン下方修正	
	＜中国＞ 冬小麦は収穫が終了。生産量は対前年度 0.4% 増の 131.9 百万トン	
	＜ロシア＞ 輸出関税がルーブル建てに変更され、関税額は実質低下	
	＜ウクライナ＞ 生産量は、前月予測から 2.0 百万トン下方修正の 19.5 百万トン	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は主に収穫面積減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアの侵攻の影響等で生産量・輸出量が大幅に減少見通し	
3	コメ	15
	＜米国＞ 収穫面積が減少。中・短粒種は 1985/86 年度以来の生産量に	
	＜インド＞ 7 年連続史上最高を更新見込みも作付け遅れ	
	＜中国＞ 1～5 月の輸入量は、飼料用を含め対前年同期比 3 割増	
	＜タイ＞ 主要生産地である北東部の土壌水分量は改善	
	＜ベトナム＞ 国内価格の高騰により、輸入量が上方修正	

Ⅱ 油糧種子	
大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
＜米国＞収穫面積は下方修正されたものの、生産量は史上最高、輸出減の見通し	
＜ブラジル＞2021/22 年度の収穫終了、高温・乾燥で減産見通し	
＜アルゼンチン＞2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続	
＜中国＞ 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し	
＜カナダ＞ 収穫面積・単収の減少により減産、輸出量は増加見通し	

(参考) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23 年度)・・・ 27

特別分析トピック

「我が国と世界の肥料をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：カナダ・アルバータ州の小麦（6月27日撮影）
天候に恵まれ順調に出穂期を迎えている。

(概要編)

I 2022 年 7 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は収穫期を、その他の作物は、生育期を迎え、南米では、今後作付けが開始される。

品目別にみると、7 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、世界の小麦については、生産量は前年度より減少する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、国際相場は 3 月には過去最高を更新した。今後も注視が必要。

また、とうもろこしについては、世界の生産量は前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通しである。いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：6 月）については、肉類（123→125）が過去最高、乳製品（144→150）が上昇したものの、穀物（174→166）、植物油（229→212）が下落した影響により、5 月より下落（158→154）した。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録。それ以降は下落していたが本年 2 月から上昇に転じ、直近では再び下落傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、7 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の7月15日プレスによると、冬作物に関し、作付面積の10%相当にあたる120万ヘクタールが収穫され、冬小麦は170万トン収穫された。

とうもろこし等の夏作物は現在生育期を迎えている。

米国農務省（USDA）によれば、2022/23年度のウクライナの小麦生産量は、ロシアの侵攻の影響を受け、収穫面積が引き下げられたことから6月見通しから200万トン下方修正され対前年度比41%減の1,950万トン、輸出量は6月見通しから変更なく、対前年度比47%減の1,000万トンの見通し。

一方、とうもろこし生産量については、ロシアの侵攻が継続しており、6月見通しから変更なく、対前年度比41%減の2,500万トン。輸出量は、対前年度比で63%減の900万トンで据え置かれている。この結果、期末在庫量は積み上がり、小麦ととうもろこし計で1,700万トンを超える見通し。

なお、ウクライナ、トルコ、ロシア、国連の4者でウクライナ産穀物の黒海からの輸出再開に関する協議が行われ、7月22日には輸出航路の安全確保で合意した。今後、オデーサ港など3港からの輸出が再開されるとみられる。ただし、穀物輸出に係るインフラが被害を受けており、実際の穀物の輸出再開までには相当程度の時間がかかると見られている。

1 カナダの小麦播種面積は対前年度比8.7%増加の見通し

カナダ統計局が7月5日に作付面積調査結果を公表した。主に西部のプレーリー（平原3州）で栽培される小麦の播種面積は、作付け時期の小麦の国際価格が高水準であったため、対前年度比8.7%増の1,030万ヘクタールで過去10年間で最高水準となった。一方、同様にプレーリーで栽培される菜種は、小麦へのシフトから播種面積は4.7%減の870万ヘクタールとなっている。また、東部で栽培される大豆の播種面積は、対前年度比0.9%減の210万ヘクタールの見通し。

カナダ農務農産食品省の7月見通しによれば、小麦の生産量は、前年度の干ばつの影響から大きく回復し、播種面積も増加することから、対前年度比56%増の3,370万トンの見通し。菜種は、播種面積が前年度より減少したものの、単収が回復することから、対前年度比46%増の1,840万トン、大豆は、単収の改善見通しにより、対前年度比1%増の640万トンの見通し。

2 ロシアの小麦生産量は前年度より8.4%増、輸出枠は解除

ロシアの小麦は7月以降、冬小麦が収穫期を迎えている。USDAによれば、前年度と比較して冬枯れ被害が少なかったため、前年度比8.4%増の8,150万トンの見通し。ロシアの農業関係者の中では2017/18年度の過去最高を更新するとの見方もある。

7月に入り、穀物の輸出税については、米ドル建てからルーブル建てに変更され、穀物輸出枠については、小麦800万トン、とうもろこし等の輸出枠300万トンが解除されたことから、対露経済制裁を科していない中東・アフリカ諸国向けを中心に、今後輸出が増加する見通し。

3 EUの乾燥による穀物生産量下方修正

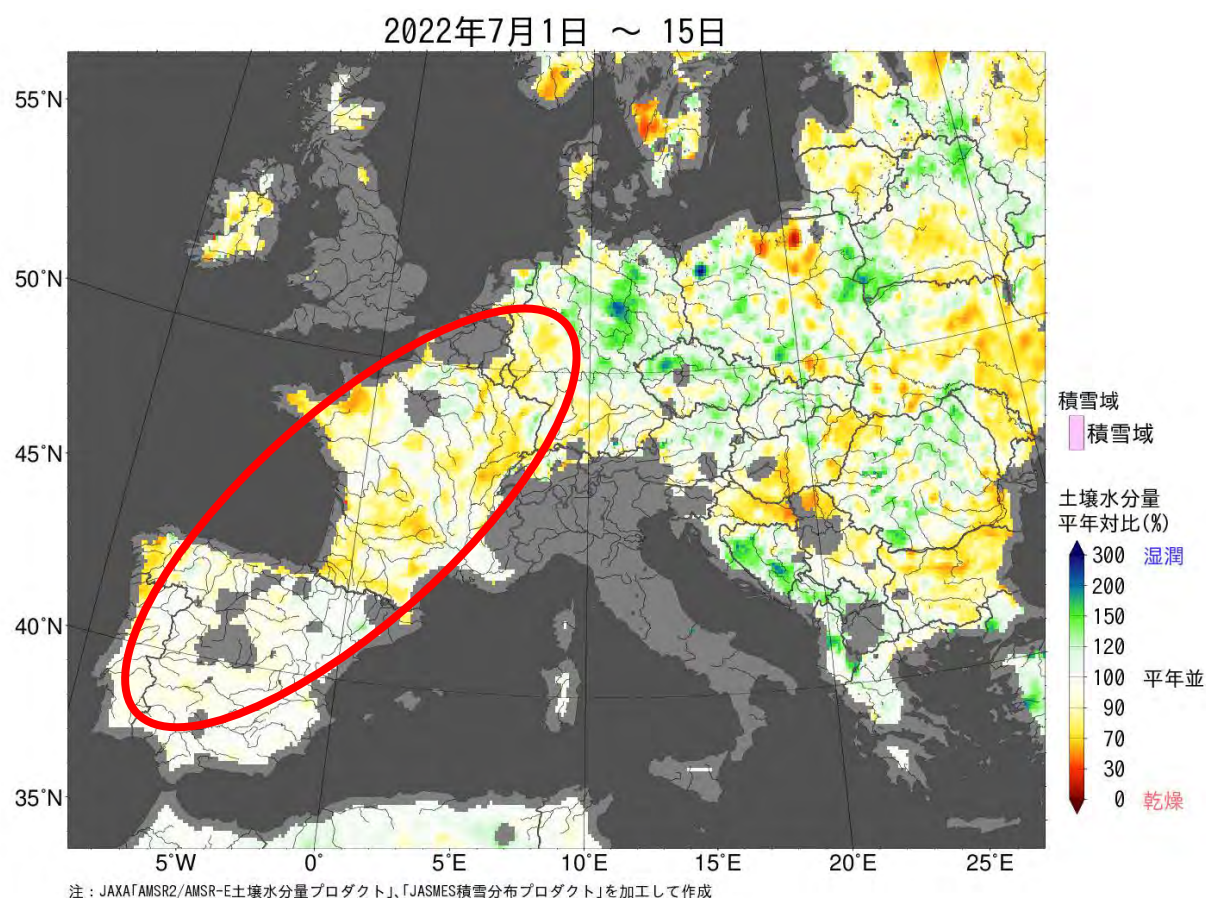
EUでは、小麦等冬穀物は収穫期、とうもろこし等夏穀物は生育期を迎えているが、報道等によると、6月から、南欧を中心に欧州の多くの地域で高温乾燥となっており、7月には地域によっては40度を超え、イタリア北部では70年ぶりの干ばつともいわれている。この乾燥の影響を受け、USDAによれば、小麦の生産量は200万トン下方修正され1億3,410万トン、夏作物のとうもろこしの生産量は25万トン下方修正され6,800万トン、イタリア、スペインなどで栽培されているコメの生産量は28万トン下方修正され146万精米トンの見通し。

なお、小麦については収穫期を迎えており、影響は少ないという見方もあるが、とうもろこしについては、受粉期に入るため、作柄への影響が懸念されるとの見方もある。

図 欧州の6月の土壌水分量の平年対比（JASMAI より）

スペインからフランス、ドイツ南部にかけて土壌水分量は平年より少ない

※イタリア等灰色の地域に関してはセンサーの特性上、土壌水分量の観測ができないために欠損となっている。



II 2022 年 7 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、6 月末、310 ドル/トン台後半で推移。7 月に入り、世界的な景気後退懸念から 290 ドル/トン台前半に値を下げたものの、EU での乾燥による生産減見込み等から 320 ドル/トン台前半に値を上げた。その後、各国の冬小麦の収穫の進展や、ウクライナ、トルコ、ロシア、国連でのウクライナ産穀物輸出再開に向けた協議への期待感等から値を下げ、7 月下旬現在、280 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、6 月末、290 ドル/トン台前半で推移。7 月に入り、米国中西部の高温・乾燥に伴う作柄悪化懸念等から一旦 300 ドル/トン台後半まで値を上げた。その後、米国中西部の一部での降雨予報やウクライナ産穀物輸出再開に向けた 4 者協議への期待感等から大幅に値を下げ、7 月下旬現在、220 ドル/トン台後半で推移。

コメは、6 月末、440 ドル/トン前後で推移。7 月に入り、一時バーツ高となったものの、再びバーツ安に転じたことと、軟調な輸出需要から値を下げ、7 月下旬現在、価格は 420 ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、6 月末、610 ドル/トン台半ばで推移。7 月に入り、欧米を中心とした世界的な景気後退懸念に伴うその他金融市場の下落等を背景に、7 月上旬に一旦 580 ドル/トン前後まで値を下げた。その後、小麦やとうもろこし価格の上昇に追随し、600 ドル/トン台前半まで値を上げた。7 月中旬以降は、米国中西部の一部での降雨予報やとうもろこし価格の下落に追随し、大幅に値を下げ、7 月下旬現在、540 ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 440 万トン下方修正され 27.6 億トン。消費量は、前月予測から 450 万トン下方修正され 27.8 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.4%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、コメで下方修正され、とうもろこしで上方修正も、穀物全体で下方修正され、27.6 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.8 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.9 億トンと前月予測から上方修正、期末在庫率は、前月予測から上方修正された。

(注：数値は 7 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.4 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、18.8%となる見込み。

(注：数値は 7 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報:ウクライナ情勢下での米国と世界の穀物生産・輸出動向

米国のとうもろこしは、7月から8月にかけて、単収の決定に大きな影響があるといわれる受粉期を迎え、大豆も開花期を迎える。6月の高温乾燥傾向から7月前半は影響が緩和されたといわれているものの今後注視が必要。一方、乾燥の影響を受けた冬小麦は収穫が終盤を迎え、生産量は対前年度比で減少。

なお、ウクライナの穀物輸出再開に向けた4者合意は行われたものの先行きが不透明であり、ウクライナからの輸出減を米国等が今後どれだけカバーでできるか注目される所。

注 文中の「2022/23年度」等は穀物年度で、ウクライナの小麦は2022年7月から2023年6月。

国や作物によって異なる(品目別需給編 P. 27 参照)。

1 ウクライナの生産・輸出動向

(1) 生産・輸出動向

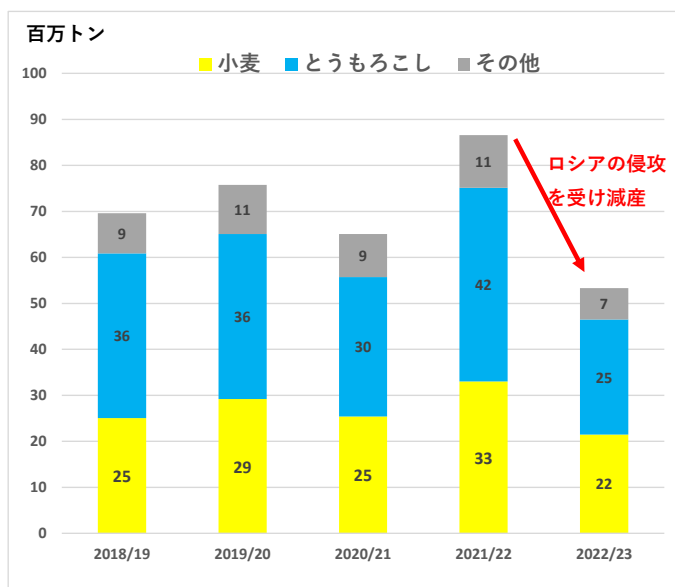
米国農務省(USDA)の2022年7月の需給見通しによれば、ウクライナの2022/23年度の小麦生産については、ロシアによる侵攻を受け、史上最高であった前年度と比べて41%減の1,950万トンで、6月見通しから、ロシア侵攻による影響を反映したウクライナ政府のデータを反映し、200万トン下方修正された。輸出についても減産に加え、インフラ等の被害や、ロシアによる黒海のオデーサ港等主要輸出港に対する封鎖により、対前年度比47%減の1,000万トンで据え置かれた。とうもろこしについては6月見通しから生産量2,500万トン、輸出量が900万トンで据え置かれている。

(2) 今後の見通しと国際相場への影響

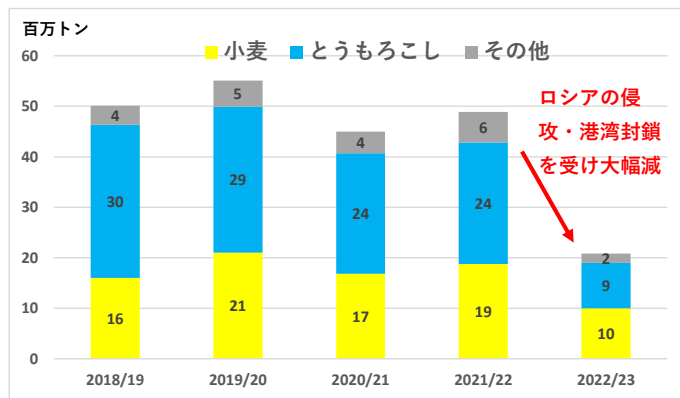
7月22日に、トルコのイスタンブールでウクライナ、ロシア、トルコ、国連の4者協議が行われ、ウクライナの黒海からの穀物輸出再開に向け合意書に署名した。オデーサ港など3港からの輸出が再開されることになっている。シカゴの小麦相場は、2月24日のロシアによる侵攻等を背景に大きく上昇し、3月7日には史上最高値(14.25ドル/ブッシェル)を更新し、その後下落し、この合意報道を受け、7月22日には7ドル台半ば(期近物)まで下落した。

図1 ウクライナの穀物の生産・輸出見通しの推移

(1) 生産量



(2) 輸出量



出典: 米国農務省 「PS&D」 (2022. 7)

2 米国の生産と輸出動向

(1) 作付・生育動向

2022年6月の作付面積調査によれば、肥料投入量の多いとうもろこしは、肥料価格の高騰

による影響を受けたとみられ、作付面積は前年度より 4 %減の 3,639 万ヘクタールとなった。

一方、大豆や小麦はそれぞれ 1 %増加し、3,574 万ヘクタール、1,906 万ヘクタールとなった。

6 月は土壤水分が平年より少ない傾向となっていたが、7 月に入り降雨があり緩和された。今後、とうもろこしが単収の決定に大きな影響を与える受粉期を迎え、大豆も開花期を迎えるため注視が必要である。

(2) 小麦

生産量は前年度比 8.2%増の 4,850 万トンの見通し。収穫面積及び単収の上方修正

により 6 月見通しから 120 万トン上方修正された。冬小麦については収穫が終盤を迎え、収穫進捗率は 7 月 17 日時点で 70%と過去 5 年平均 (71%) 並み。生産量は、干ばつの影響を受け、対前年度比 6 %減の 3,270 万トンの見通し。

一方、春小麦は生育期を迎えており、出穂率は同時点で 68%と過去 5 年平均の 90%と比較して遅れている。生産量は干ばつ被害のあった前年度と比較して 52%増の 1,370 万トンの見通し。デュラム小麦については、作付面積の増加から同様に前年度と比較して倍増以上の 210 万トンの見通し。

輸出量は、他の輸出国と比べて、価格競争力が乏しいことから、前年度より 0.5%減の 2,180 万トンと伸び悩む見通し。

(3) とうもろこし

生産量は、作付面積の減少から前年度比 4.0%減の 3 億 6,840 万トンとなる見通し。なお、6 月作付面積調査において、3 月の作付意向調査より作付面積、収穫面積とも上方修正されたため、生産量は 110 万トン上方修正された。

輸出量は、生産量の減少により、前年度より 2.0%減の 6,100 万トンの見通し。

(4) 大豆

生産量は、前年度より作付面積の増加から前年度比 1.6%増で史上最高の 1 億 2,260 万トンとなる見通し。しかしながら、6 月の作付面積調査において 3 月の作付意向調査時点より作付面積・収穫面積と下方修正されたため、生産量は 6 月見通しから 370 万トン下方修正された。

輸出量は、国内需要の増加により、前年度より 1.6%減の 5,810 万トンの見通し。

図 2 米国の小麦、とうもろこし、大豆の作付面積の推移

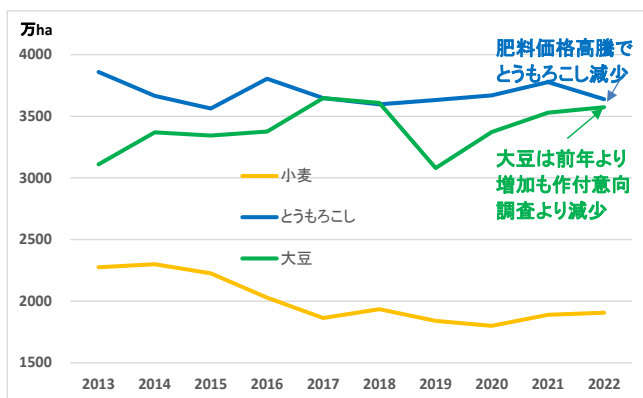
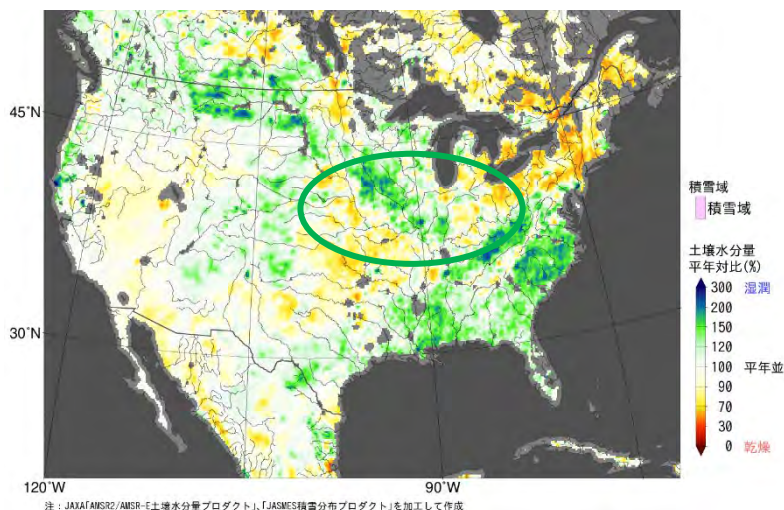


図 3 北米の 7 月前半の土壤水分量の年対比(JASMAI より)
コーンベルトの土壤水分不足は改善



3 世界の穀物貿易への影響

(1) 小麦

ウクライナの穀物輸出再開に向け、4者合意となったが、ウクライナの穀物輸出に係るインフラが戦争による被害を受けており、合意の翌23日にはロシアにオデーサ港が攻撃されたことなど、実際の穀物の輸出再開までには相当程度の時間がかかると見られている。小麦輸入国においては、7月以降、新穀の収穫が開始されるEU産、ロシア産か、3年連続豊作が予想される豪州産を中心に手当てを行うとみられる。

ロシア産については、増産により輸出増が見込まれており、対ロシア向け経済制裁を実施していない中東、アフリカ諸国向けに引き合いが増加しているとみられる。6月末には小麦、大麦で100ドル/トンを上回る水準に上昇した可変輸出関税は、7月以降はルーブル建てに変更され、ドル換算では割安になるとみられていることや、6月まで設定されていた小麦800万トン等の輸出枠が解除されたことが背景にあるとみられる。

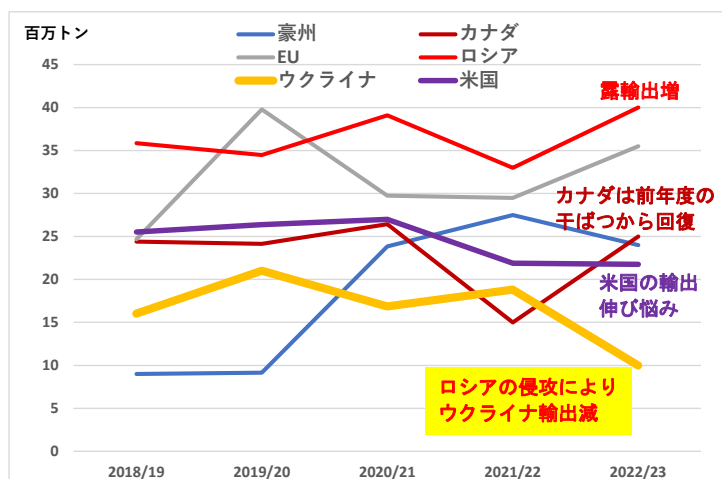
EU産は輸出増加が見込まれている。イタリアで70年ぶりの干ばつと報道されている等、7月に入り各地で高温乾燥となっているが、すでに収穫期を迎えているため、その影響はある程度免れるとみられる。

輸出が伸び悩んでいる米国では冬小麦の収穫が開始され、今後新穀の輸出が開始されるとみられる。前年度干ばつであったカナダ産も豊作が見込まれている。しかし、中東やアフリカ諸国は、北米産については輸送距離の問題から調達コストが高くなることも予想されることから、ロシア産、豪州産を中心に手当てをするのではないかとみられる。なお、豪州産穀物に関する輸出施設使用枠の確保については、米国など競合先国の輸出状況を含め、引き続き注視が必要である。

(2) とうもろこし

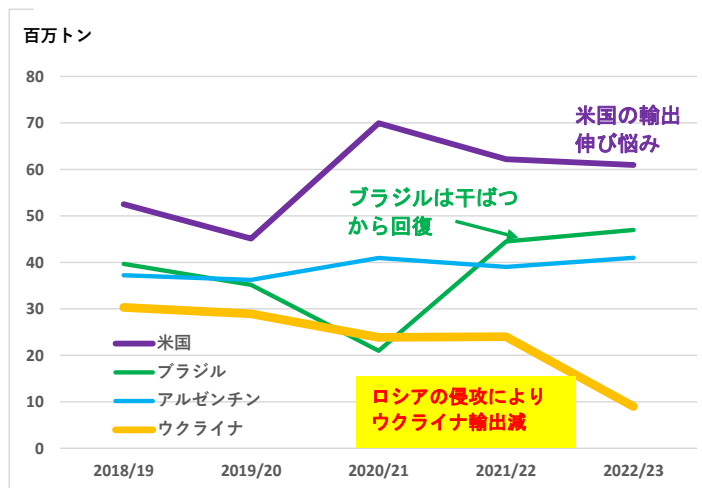
USDAによれば、2022/23年度のウクライナ産の輸出量も前年度比63%減の900万トンとなる見通し。一方で、冬とうもろこしの収穫が本番を迎え、これから輸出が開始される2021/22年度のブラジル産は史上最高の生産量(前年度比33%増の1億1,600万トン)となり、それに伴い輸出量も史上最高の4,450万トン(前年度比2.1倍)となる見込み。なお、7月に受粉期を迎えるEUのとうもろこしが高温乾燥の被害を受け、ブラジル産の輸入を増加させる可能性があるともみている業界関係者もいる。

図4 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 7)

図5 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



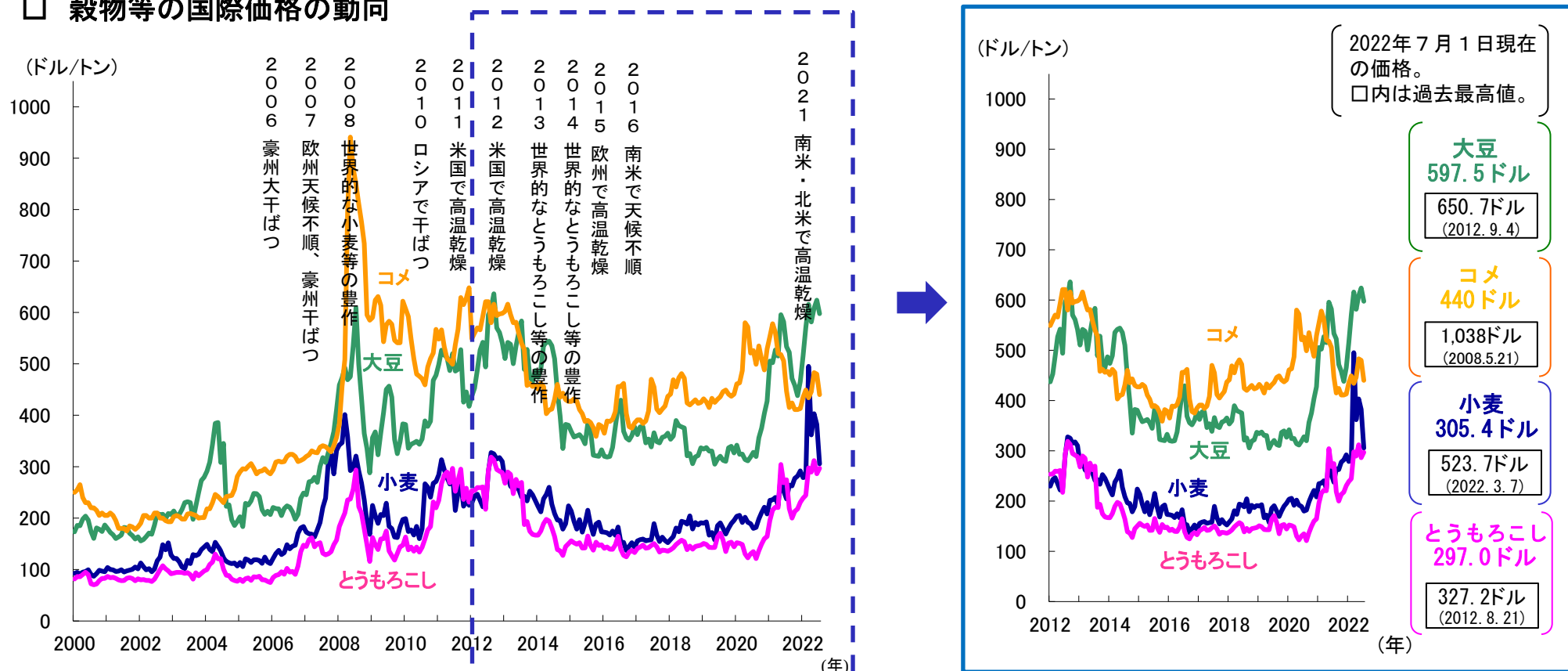
出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 6)

なお、今までウクライナ産を輸入していた中国は、ブラジル産輸入に関し検疫に関し合意したものの、その後の遺伝組み換えの承認手続きに時間がかかっているとみられ、当面は米国産を手当てしている模様である。作付面積減による減産から輸出量も伸び悩むとみられている米国産が、今後、どこまで輸出を伸ばすか引き続き注視していく。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、さらに上昇（小麦は史上最高値を更新）。 コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



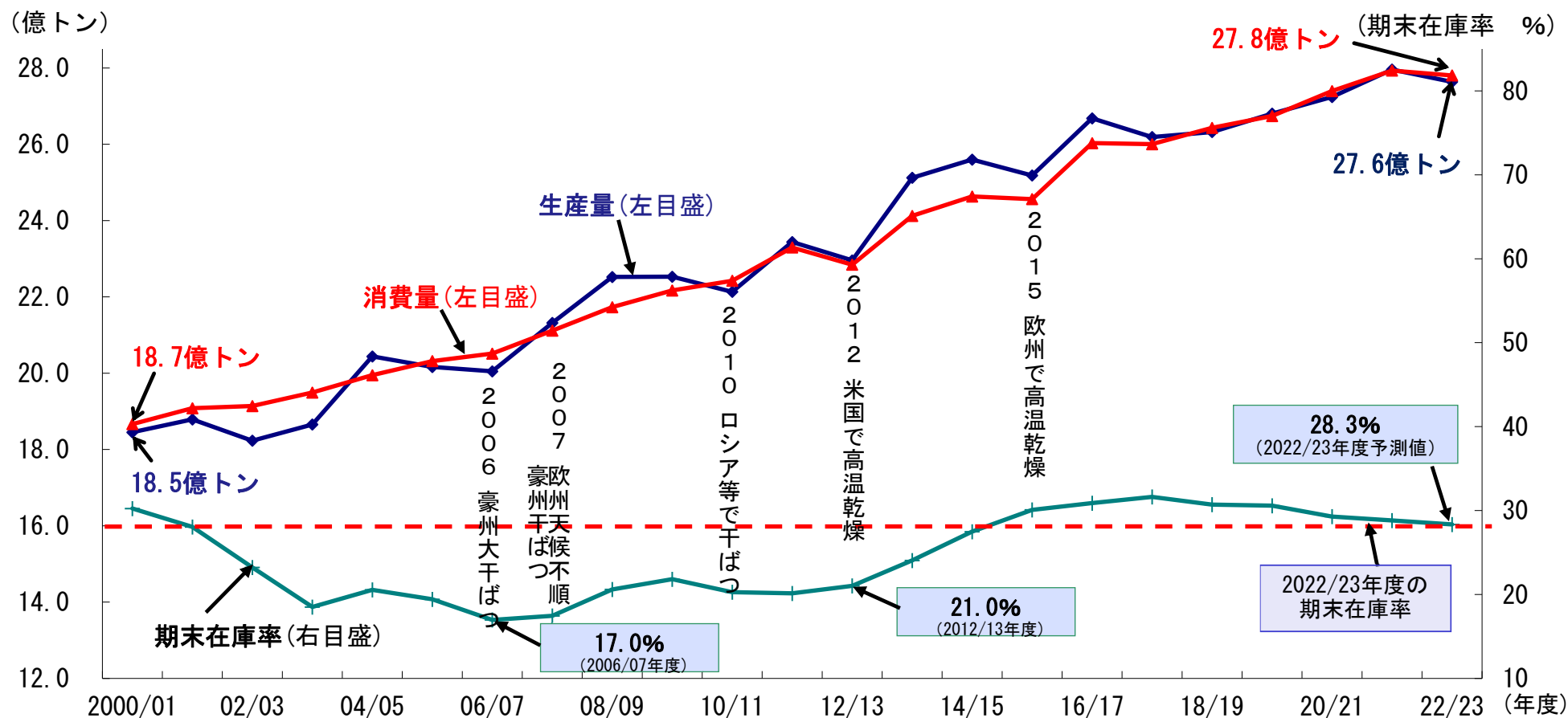
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、コメの2022年7月1日現在の価格は、6月29日の価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.3%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

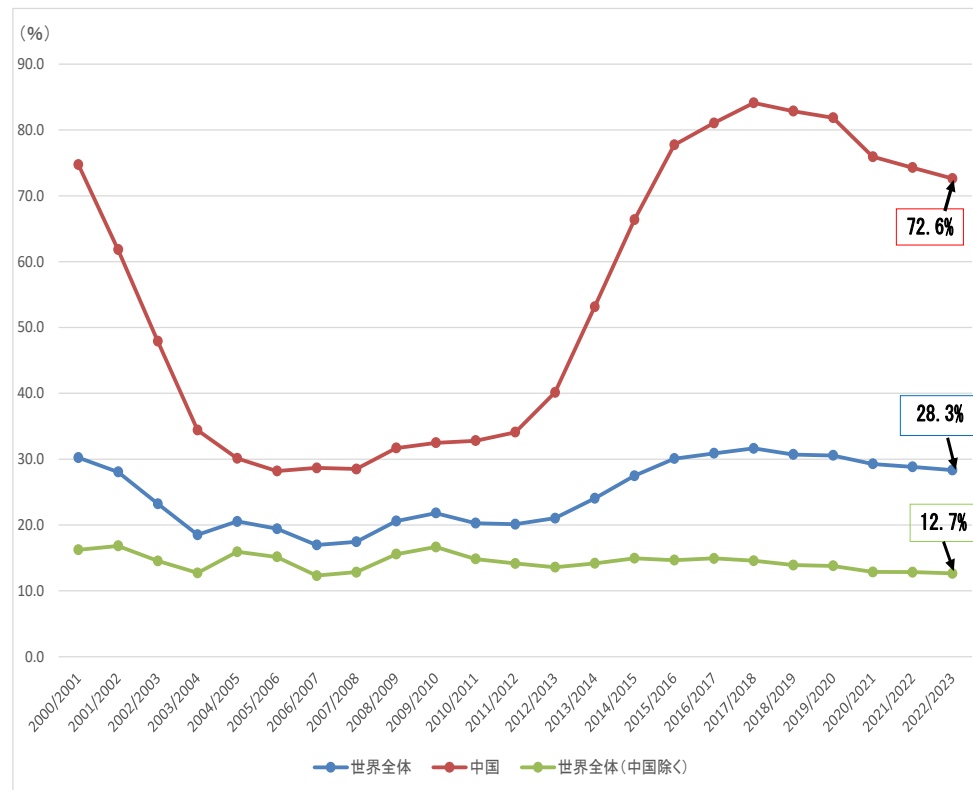


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(July 2022)、「PS&D」

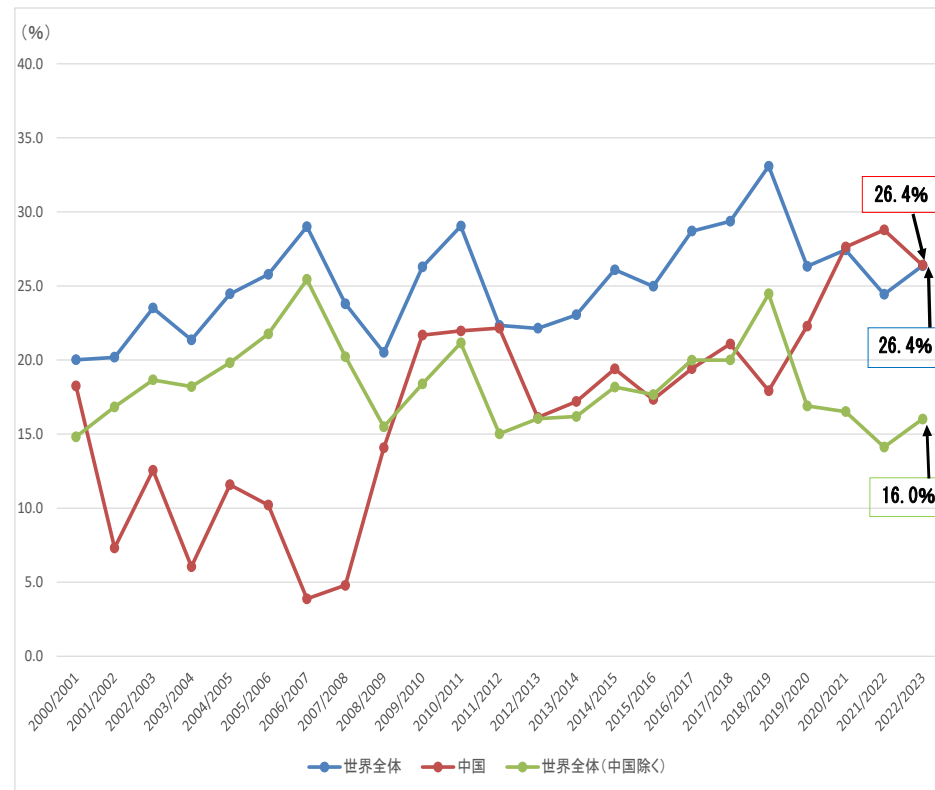
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(July 12, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

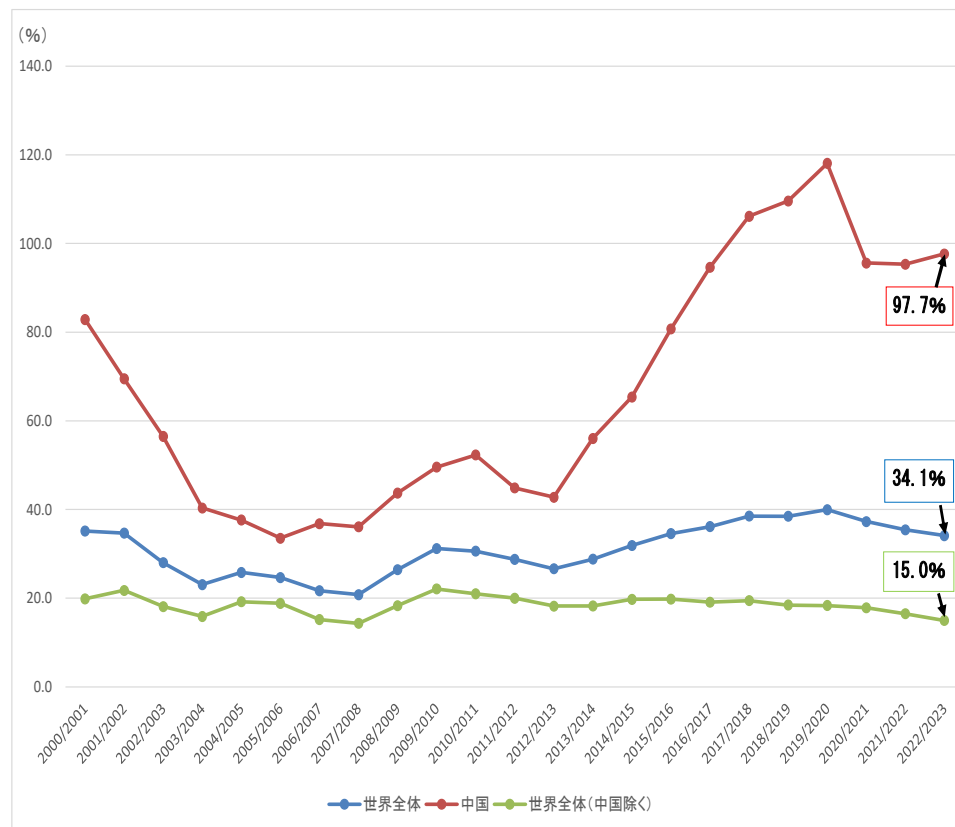
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

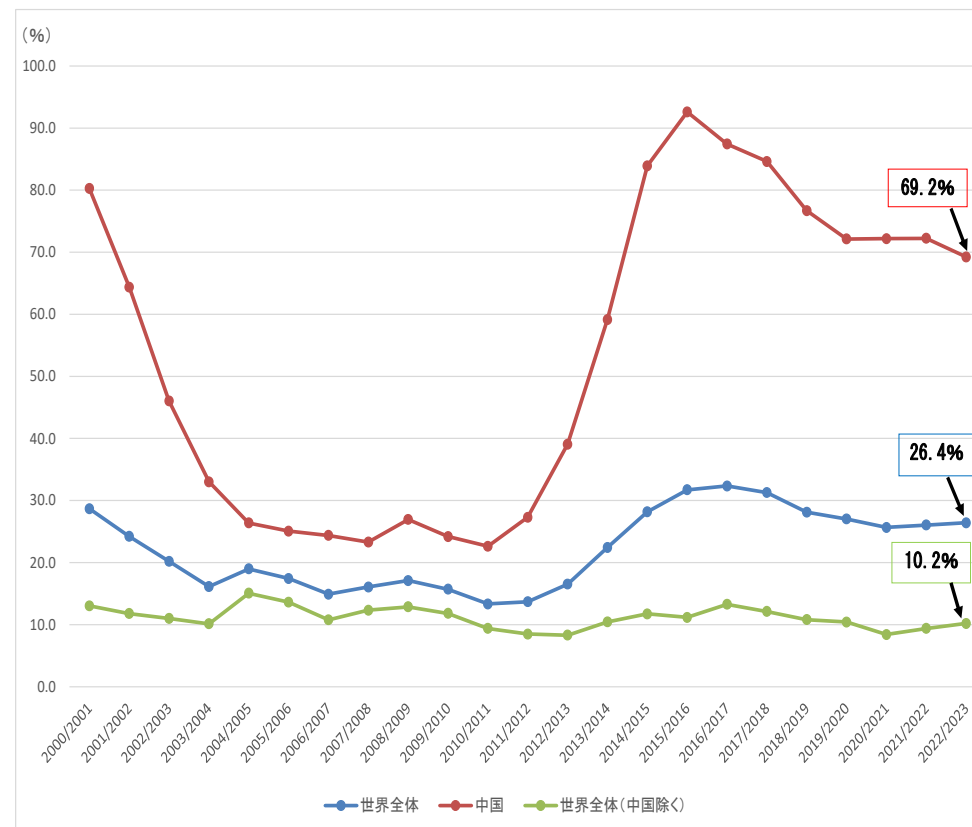
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(July 12, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

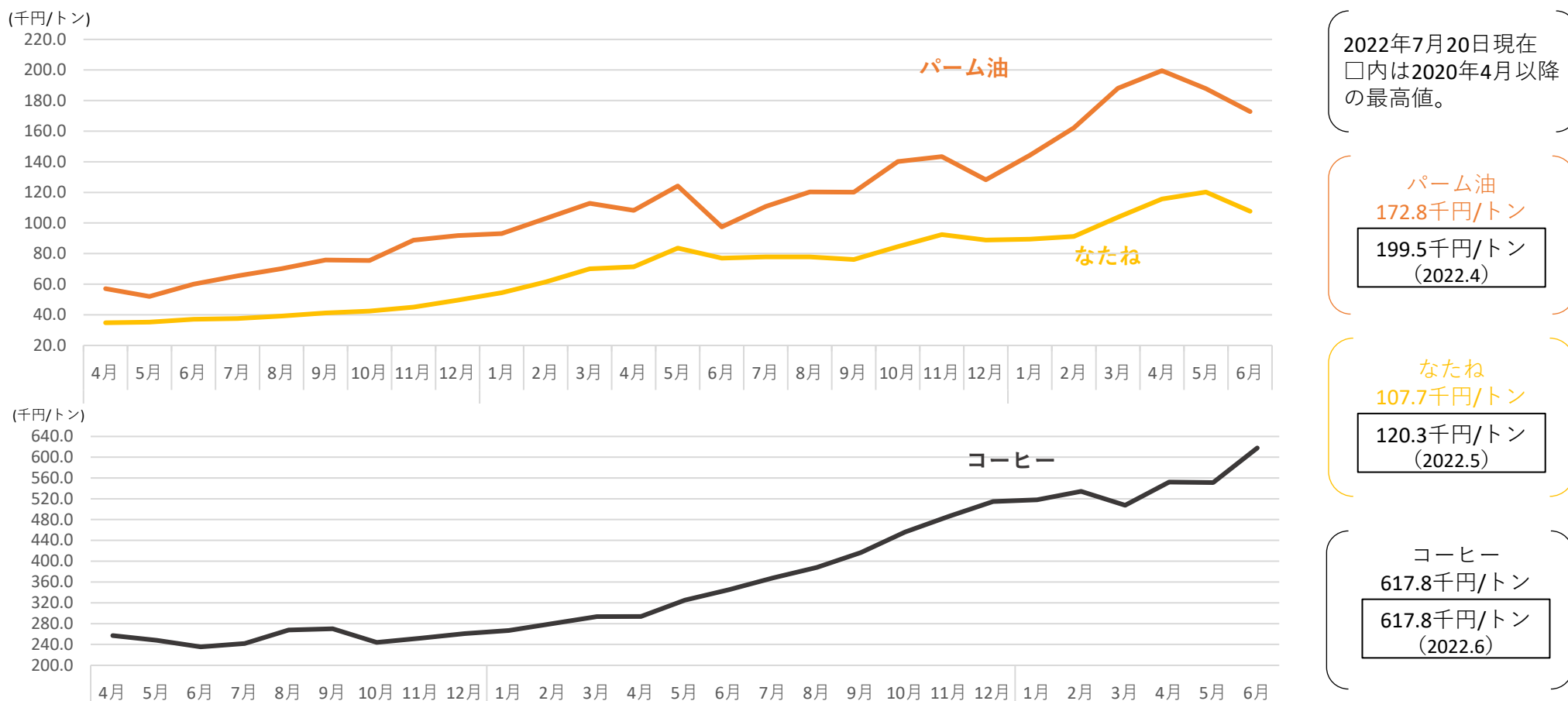
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっているほか、インドネシアによるパーム油の輸出制限（5月23日解除）が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

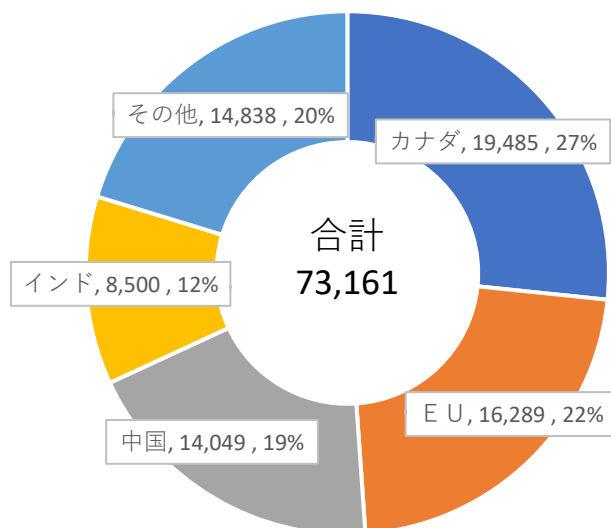


※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

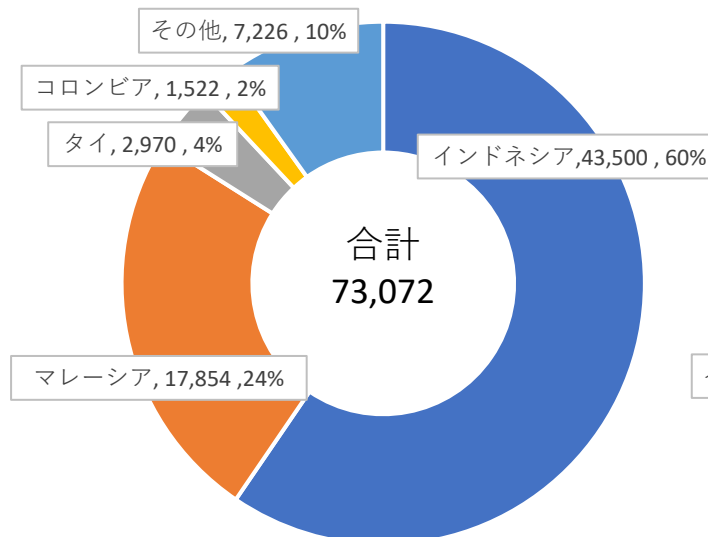
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



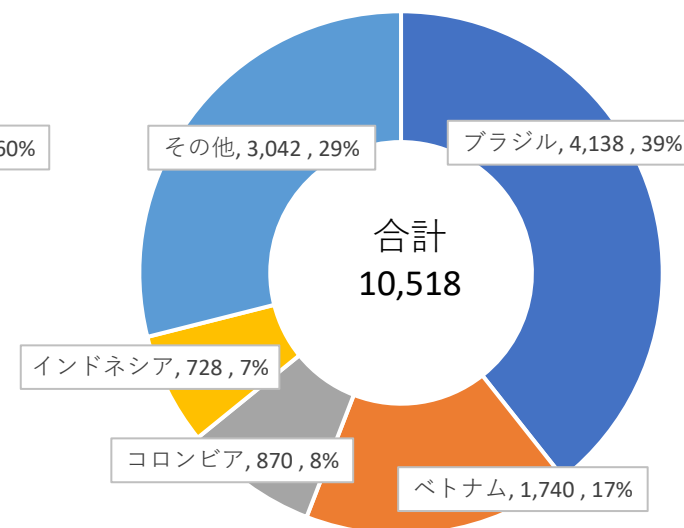
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
コーヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	617.8
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	112.1
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	179.0

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年6月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.3～139.2（前年同月比で－0.6%～36.0%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年1月～令和4年6月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	103.2	107.1	107.2	108.0	107.5	107.9	9.0%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	100.4	100.9	100.9	100.1	100.1	110.0	11.1%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	102.3	102.1	102.9	103.1	104.0	104.7	3.9%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	124.6	128.4	132.2	134.8	135.4	139.2	36.0%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	98.3	99.0	99.9	100.7	101.0	99.8	1.2%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	112.3	113.3	120.3	123.9	126.1	125.0	25.1%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	98.5	100.2	99.3	103.0	105.3	104.0	7.8%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.7	99.9	99.7	99.1	99.5	99.3	-0.6%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	101.2	101.5	101.9	102.4	102.6	103.2	3.2%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年1月～令和4年7月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3	R4							
品目	平均	平均	平均	平均	平均	12月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	98.4	105.3	104.6	105.1	104.6	105.9	109.8	3.7%	12.3%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	97.8	98.4	99.0	99.0	99.0	110.0	111.2	1.1%	12.3%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	100.7	101.1	102.0	101.6	102.4	102.9	103.3	0.4%	3.0%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	116.3	122.9	126.4	129.6	130.8	132.7	139.1	4.8%	38.1%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	97.5	98.1	98.4	99.0	99.6	98.8	99.8	1.0%	1.7%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	105.6	105.9	112.1	117.2	117.2	118.3	117.2	-0.9%	12.2%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	92.1	98.6	98.6	105.0	104.5	105.0	105.0	0.0%	5.5%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.7	99.7	99.7	99.3	99.3	99.3	99.0	-0.3%	-0.5%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年8月号（7月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）1～4月の牛肉輸出量、中国と台湾向けが大幅に増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002301.html

（豪州）牛群再構築は継続も、肉牛取引価格は大幅下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002313.html

◆豚肉

（米国）豚肉小売価格の上昇により豚肉需要減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002314.html

（カナダ）1～4月の豚肉輸出量、米国向けが好調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002315.html

（EU）22年3月の豚肉生産量、前年同月比7.4%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002316.html

（中国）豚肉価格は上昇に転じるもいまだ低水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002317.html

◆鶏肉

（タイ）2022年に入り鶏肉価格は引き続き高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002318.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）生乳取引価格は上昇傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002326.html

（豪州）乳価は好調も、生乳生産量は低迷

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002319.html

（NZ）2021/22年度の生乳生産量、前年度よりやや減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002320.html

◆飼料穀物

（世界）2022/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度並みの見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002303.html

（世界）南米での生産回復などから大豆の期末在庫は大幅増、1億トン台に回復

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002321.html

（米国）2022/23年度の米国トウモロコシ、在庫率は9%台の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002322.html

（ブラジル）2021/22年度トウモロコシ生産量、前年度比3割増の見込み

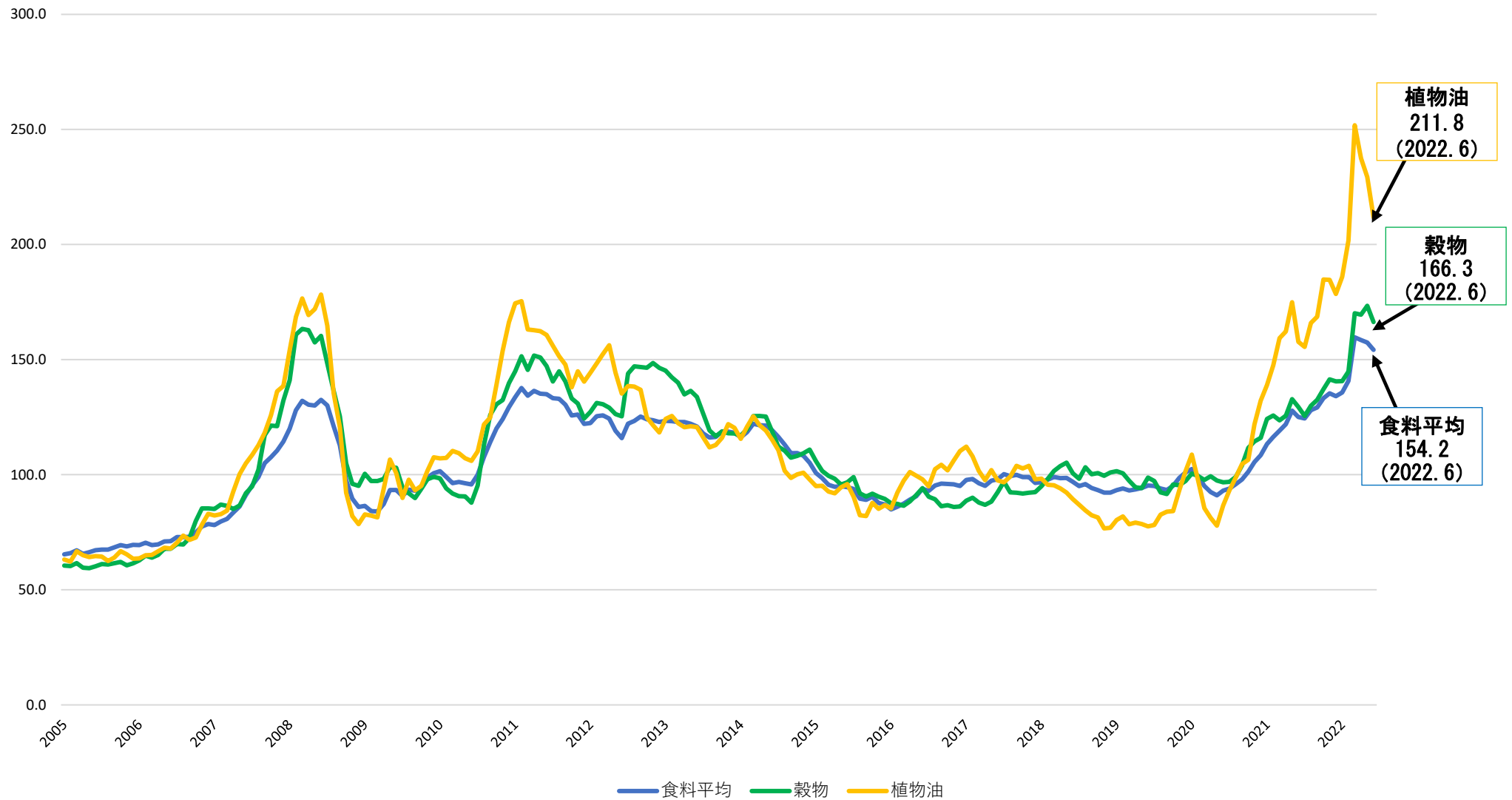
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002323.html

（中国）トウモロコシ、生産量は前年度並みも2億7000万トン台を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002324.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.7)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等